『BASURA バスーラ』をご覧になった皆さんから
いち早くコメントが頂きました！

このような作品が作られ、
多くの人々の目に触れるべきだとの必要性を痛感しています。

——— 坂本龍一（音楽家）

想像を絶する光景である。まさにこの世の地獄だ。
スモーキーマウンテンに暮らしている者は、ここで生まれ、ここで死ぬ運命にある。
生と死の境界線など何もない。茫漠とした天と地の果てしない相克があるだけだ。
絶対の貧困があるだけだ。
この絶対の貧困は、権力による人為的な所産である。
権力に群がる恥知らずな連中に、私は激しい怒りを覚えずにはいられなかった。

——— 梁石日（作家・『闇の子供たち』）

ひとり一人の人生、ひとり一人のいのち。人間とは、生きるとは。
根源的なことがこの映画から鋭く迫ってきます。
わたしたちはここに登場する人たちと、決して無関係ではないし、無視して通り過ぎることはできない。
アジアの深い繋がりのなかで生きていることを、改めて突きつけられます。

——— 大石芳野（写真家）

持続する意思の力と感受性に、心からの共感と感謝をもって私は伝えたい。
「非力ながら、ほんとに無念なほど非力ながら、ここにあなたの仲間がいる」と。

——— 落合恵子（作家・子どもの本の専門店主宰）

僕ら人類が与えられた大きな宿題を、まだほとんど手つかずの宿題を、
この四ノ宮さんという監督が、大声で
「これ忘れてますけど、この宿題至急解決しないとだめですよ!!」って
言っているような気がしました。
人類はこの問題——お金の問題、教育や医療の問題、子供の問題を
そろそろ真剣に考えてゆかねばならないようです。
僕もその一人。
なにが出来るのか分かりませんが、まずはじっくり考えたいと思います。

——— YANAGIMAN（音楽プロデューサー）

腹が立つ！ムカつく！
子供たちの夢や希望を奪い取る腐敗したフィリピン政府。
どうにかせねば・・・
そんな正義感（感性）を奮い立たせてくれる《全く腹が立つ映画》だ。

——— ドン小西（ファッションデザイナー）

四ノ宮浩という生き方

これは「映画」なのだろうか? こんな「映画」は見たことがない。
貧困とごみの中で格闘する子どもたちや大人たち。
彼らの中に入ってともに生き、
警察に「殺された」であろう青年の死の「理由」を問い続け、
映画制作費の中からカネを出して貧しい人たちにクリスマスプレゼントを配り、
彼らのために仕事を作り、仕事をあっせんする。
これは「映画」などという生やさしいものではない。
映画には作意がある。
しかし、ここに作意は見えない。
その結果、図らずも、四ノ宮浩という人間の生き方そのものの記録となった。
四ノ宮の生き方が、私たちの目の前にこれでもか、これでもかと迫りながら、
日本にいる私たちの生き方を問うてくる。
フィリピンと出会った四ノ宮が、
ゴミ捨て場のスモーキーマウンテンに行きつき、
アフガンからイラクへ旅を続けてふたたびフィリピンに戻る、
彼自身の生き方そのものが導いた、必然の旅だったのだ、と私は気づく。
四ノ宮と出会ったのは15年前、『忘れられた子供たち スカベンジャー』の取材だった。
四ノ宮に言わせれば、フィリピンの光景は20年前と全く変わっていない。
しかし、彼はクリスティーナやエモンの一家の20年後の「その後」を追う。
幸せを求めてゴミ山を漁り、海を渡る。
そんな彼らとダブるのは、日本という非情な国家によって
つい最近、両親と引き離されたフィリピンの少女の姿だ。
被害者のいない密入国という犯罪、国の都合で国が作り出した犯罪だ。
貧しき者が幸せになる権利を否定することは許さない、
と四ノ宮は言葉で怒る代わりに、どこまでも彼らに寄り添う
自らの生き方で示している。
僕はいま、日本という国の北の端の、財政破綻した小さな町にいる。
国家から切り捨てられる町で、切り捨てられる人々ともに暮らしていると、
格差も差別も貧困も、よく見えてくる。
こんな小さな町にも、国境を超えて外国人たちが働きに来る。
そんな彼らと向き合うとき、ああ、僕は四ノ宮とつながっている、繋がらなければ、と確信する。
四ノ宮浩、『BASURA バスーラ』をありがとう。
あなたの映像では苦しみの海である、あのゴミの山さえ美しい。

——— 本田雅和（ジャーナリスト）